



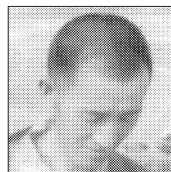
ンガバ・キルティ寺院僧侶。チベット新年のモンラム祭(大法要)を当局が規制。僧侶の抗議があった翌日、1人でンガバの大通りに出てダライ・ラマ法王の写真を掲げ、自らに火を放った。駆けつけた治安部隊に撃たれたあと連れ去られ、現在も消息ははっきりしていない。武器も持たず、焼身をはかって生命の危険に瀕する僧侶への発砲はチベット人の大きな怒りと呼んだ。



ンガバ・キルティ寺院の元僧侶。正午前、ンガバの大通りで「チベットに自由と独立を！ダライ・ラマ法王のご帰還を！」と叫び、自らに火を放った。2010年6月までキルティ寺院で学んだが、そのあと還俗していた。



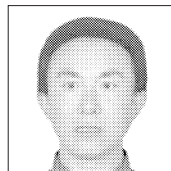
アムド、ンガバ・マミー尼僧院の尼僧。チベットの女性として初めて焼身抗議を行った。チベットにおける宗教の自由とダライ・ラマ法王の帰還を訴えながら尼僧院の近くで自らの身体に火を放った。彼女が息を引き取るまで10分もかからなかった。当局は尼僧院に夜の間に遺体を地中に埋葬するよう命令した。近隣のチベット人商店や飲食店にシャッターを降ろし、追悼の意を示した。



カンゼ・チベット族自治州のカンゼ僧院の僧侶。正午頃、僧院内で宗教儀式が行われていた際、大勢の僧侶や一般人が見守る中、突然儀式の輪の中に走り出て、ガソリンを被り火を付けた。炎に包まれながらダライ・ラマ法王の帰還、そしてチベットにおける自由と平等を叫んだ。病院に運び込まれた後にも治療を一切拒否したため、カンゼ僧院の僧侶たちに看護されている。



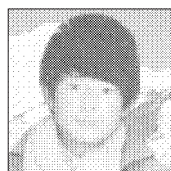
タウ、ジャンジュップ・チュリン尼僧院の尼僧。断食行のため人々が集まっているところに歩み出て自らに火を放ち「チベットに自由を！ダライ・ラマ法王のご長寿を！」と叫んだ。2011年8月15日に僧侶ツェワン・ノルブが焼身をはかったのと同じ場所だった。聡明でもの静かな尼僧であり、焼身の数日前には「焼身した人々を本当に可哀想に思う」「ダライ・ラマ法王がお帰りにならない限り何も変わらない」と話していた。



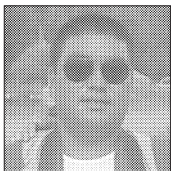
カルマ寺院の元僧侶。チベット自治区チャムド地区カルマ郷近くのギンタン村で自ら火を放った。12月6日死亡。妻と息子2人娘1人の家族で、妻ドルマも拘束され不明。「兄弟たちよ、勇気を失うなかれ」「宗教を否定する独裁政権をどうして信頼できよう」など遺言を残した。カルマでは10月26日に政府の建物で爆発があり、当局はカルマ寺院を捜索し、多くの僧侶が拘束されていた。



2人ともにンガバ中心部のホテルの中庭で自らの体に火をつけ、「ダライ・ラマ法王の帰還を」「法王が1万年生きられますように！」などと呼びながら路上を走った。テンニは当日に、ツルティムは翌日7日に死亡した。2人の死を知った街の人々は商店や飲食店にシャッターを降ろして追悼の意を示した。しかし、当局は人々が彼らの家族のもとを慰問のために訪れることを禁止し、街の警戒を強化した。ロブサン・ツルティムは僧院で行われる愛国再教育を非難し、真実を人々へ知らせ、自由への闘いのために焼身する、という遺書を残している。



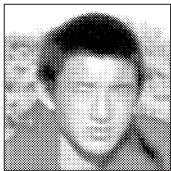
アムド、ンガバ・キルティ寺院の僧侶。白昼、ンガバの大通りに出て自らに火を放った。炎に包まれながら「チベットに自由を！ダライ・ラマ法王のご帰還を！ダライ・ラマ法王のご長寿を！」と叫び続けた。警官たちは彼に向かってレンガを投げ、火を消した後もこん棒などで殴りつけていた。焼身前に仲間の僧侶に「耐えがたい苦しみを心に感じる。3月16日にはこの世に何かの軌跡を残すつもりだ」と話していた。3月16日は2008年のこの日、ンガバで抗議に立ちあがったチベット人に銃が向けられ、多数の死者が出た日だった。



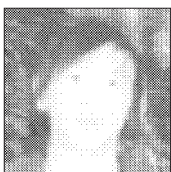
カム、タウのニンツォ寺院の僧侶。白昼、チベットの自由と法王帰還を訴えるチラシを撒いた後、「チベットに自由を」と叫んでひとり大通りを行進、地方政府庁舎の近くで自らに火を放った。視力の障害をのりこえて出家して13年学び、学業に優れていたという。家族は両親と姉と妹で、インド行きを勧められても、実家には他に兄弟がいないからと地元に残っていた。



2人ともンガバ、キルティ寺院の僧侶。朝の勤行を終えた後、僧院を出てンガバの大通りの交差点に立ち、2人でチベット国旗を掲げ「ダライ・ラマ法王のご長寿を！」「チベットに宗教の自由を！」と叫び、自らに火を放った。治安部隊は消火後、彼らを連れ去り、現在も行方不明。2人が炎に包まれたのは、2011年3月16日にロブサン・プンツォが焼身した同じ場所だった。ロブサン・ケルサンはロブサン・プンツォの弟という。



アムド、ンガバ市街地の野菜市場のちかくで焼身抗議。彼はダライ・ラマ法王の写真を掲げながら「チベットには信仰を持つ権利がない！チベットには自由がない！」と叫んでいたという。警察は火を消すと彼を連行したが、現在も消息は不明。



2人ともンガバ・キルティ僧院の元僧侶。午前11時半ごろ、ンガバの大通りで自らに火を放った。炎に包まれながらも両手を合わせたまま「チベット人は団結するべきだ」「チベットに自由を」と訴えたという。駆けつけた警官らは2人を殴り倒し、火を消した。その後も暴行を加え、人民病院に運び込んだ。カヤンは2008年3月に叔父タンを治安部隊に殺されていた。チュペルは今年3月にロブサン・プンツォが焼身した後、僧院を追われ、還俗していた。

